第23回総会学術大会を終了して

第23回日本核医学技術学会総会学術大会
大会長　山　田　正　人

第23回総会学術大会は平成15年７月26（土），27日（日）の２日間に渡り，金沢市内のほぼ中心に位置している金沢市文化ホールにて開催いたしました。今年は例年に比べこの時期としては涼しく会場外の休憩場所も参加者で賑わっていました。演題数は早くから演題応募のお願いをしましたところおかげさまで予想以上の応募があり90題となりました。参加者数は演題数の増加に伴って558名となりました。実行委員会一同大変嬉しく，感謝しております。発表会場は会場予約の段階で全館を押さえていましたのでプログラム編成も無理なく行えました。会場の大きさには多少違いはありましたが，大ホール，大会議室，円卓会議室を発表会場としました。また，第２会場の大会議室のある会議展示棟１階にはメーカーによる学術展示コーナーも設けました。多数の会員が入場され好評でした。

この文化ホールには茶室があるとのことで１日目に時間限定で呈茶サービスを行いましたが，いかがでしたでしょうか。

第23回総会学術大会のメインテーマは『医療を生き抜く優しい核医学技術』としました。当初，実感はなかったのですが，平成15年度になりまして包括医療が導入されはじめますと現実問題として核医学が生き残っていくためにと考えることになってまいりました。テーマは間違っていなかったと思います。特別講演Ⅰは金沢大学大学院医学研究科バイオトレーサ診療学の利波紀久教授に「核医学診療：新世紀の展開」と題して21世紀の核医学の診断から治療までを多岐にわたり講演頂きました。特別講演Ⅱは福井赤十字病院副院長の野口正人先生に「クリニカルパス，医療の IT 化は病院に何をもたらすか？」と題してクリニカルパスの導入における課題についてお話していただきました。クリニカルパスの中での画像診断は変革されるだろうと思いました。海外招待講演には前 SNMT 会長の Frances K. Keech 先生をお招きし「米国の CT-PET の現状と技師の役割」と題して米国の資格制度の問題点や今後のあり方についてお話していただきました。日本における CT-PET 使用法の示唆が頂けたと思います。文化講演は能登和倉温泉加賀屋会長の小田禎彦先生に「日本一への道のりとその責任」と題して患者さんの接遇にも関係する接客に対するお話を頂きました。先生のサービスについての考え方に深く感銘を受けました。参加した会員からも好評を得ました。

シンポジウムは今後の核医学診療に欠くことのできないクリニカル PET をテーマをとして基調講演と，シンポジストには PET 検査の有用性，装置の特徴，施設基準，経営性について講演して頂きました。ディスカッションでは特に施設基準の設備と専門技術者の資格，PET 薬剤の供給体制，サイクロトロン・PET システムの経営性について議論頂きました。二日目の最後にもかかわらず多数の会員が出席していました。関心の高さが伺え嬉しく思いました。卒後教育プログラムは「PET の基礎」，「SPECT の定量化のキーポイント」，「核医学領域の安全管理」，「RI の管理技術」について基礎講座を２会場並列で２講座ずつ開講しました。今回，本学会の方針としてシンポジスト，基礎講座講師には核医学専門技術者の方にもお願いいたしました。各講座ともタイムスケジュールが許されるのなら１時間枠でお願いしたいとの意見もありました。実行委員会企画としてパネルディスカッション「乳がんにおける放射線診療の現状と展望―治療に役立つ連携とは―」を行いました。核医学検査と各種放射線検査の連携について依頼医と放射線技師の立場から検討していただきました。会員の中から興味のある内容で良かったとの声がありました。また，新しい試みとして大ホール前に脳血流の定量に関しての会員が

気軽に質問ができる「よろず相談コーナー」を設けました。協力頂きました先生方には感謝致しております。

ランチョンセミナーも実施いたしました。一日目は臨床医が望む腫瘍シンチグラフィについて河邊譲治先生に，二日目は脳血流画像の重ね合わせの実際について林万寿夫先生に，また水村直先生には脳血流画像の統計解析ソフトにおけるデータベースの共有と多施設間研究について講演頂きました。二日間とも多くの会員が参加していました。

一般研究発表はスライドとノートパソコン持ち込みによる形式を取り入れ，スムーズな進行が行えるよう努力しましたが不慣れな面もあり発表会員の皆様にはご迷惑をおかけしたのではないかと思います。学会としても今後 PC 発表主体の運営方法について確立しないといけないかも知れません。

懇親会は第二会場の大会議室を模様替えして会員の意見交換が気軽にできる雰囲気で行いました。琴演奏，ひょいひょい太鼓のアトラクションや，地酒コーナーは好評でした。おかげさまで250名の参加があり大変盛況でした。

21世紀の核医学技術はより専門性が求められると思います。是非，本学会が提唱している専門技術者制度を社会的に認知してもらうようアピールしなければと思います。総会学術大会は有用な技術を発信できる場として活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが本大会を無事成功裡に終了できましたのはご支援とご協力頂いた各企業の方々，ご指導，ご鞭撻頂いた学会長はじめ役員の方々および関連委員会，事務局スタッフのお陰だと深く感謝いたしております。また，大会開催に向けて終始助言を頂きました諸先輩ならびにサポートして頂いた宮崎吉春実行委員長はじめ実行委員会の皆様に厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。